



**萩ジオパーク活動計画
(2026-2029 年度)**

萩ジオパーク推進協議会

目次

第1章 基本計画	4
1-1 計画の基本情報	4
(1) 計画策定の趣旨.....	4
(2) 計画の位置づけと構成.....	4
(3) 計画期間.....	5
1-2 基本方針	5
(1) 背景：ジオパークの理念とこれまでの活動.....	5
(2) 課題：啓発活動と産業・経済活動との乖離.....	6
(3) 基本方針：理念の「普及」から「実装」へ.....	6
1-3 施策の基本構造	7
(1) 施策体系の考え方.....	7
(2) 循環型構造としての施策配置.....	8
(3) 各施策の基本的役割.....	8
(4) 施策間の関係性.....	9
1-4 行動計画の考え方	10
1-5 計画の推進と見直し	10
第2章 実行計画	11
2-1 総論	11
(1) 本実行計画の位置づけと構成について.....	11
(2) 実行計画の役割.....	11
(3) 施策構成について.....	11
(4) 取組と仕組み（場）の関係について.....	14
(5) 新たに設ける3つの関わり方.....	14
2-2 施策の内容	17
施策1：活動基盤の整備	17
施策2：共感の場づくりによる【視点の共有】	21
施策3：試行錯誤の場づくりによる【探究と創造】	24

施策4：試行錯誤の場からの【コンテンツの創出】	28
施策5：出会いの場づくりによる【情報の流通】	32
第3章 行動計画	36
3-1 行動計画の位置づけ	36
3-2 行動計画の構成	36
(1) 表A：主な取組一覧と行動計画上の扱い	36
(2) 表B：新しい仕組みの組み上げ	37
3-3 行動計画の運用について	37

第1章 基本計画

1-1 計画の基本情報

(1) 計画策定の趣旨

本計画は、萩ジオパークの取組を持続的に推進していくため、これまでの活動の蓄積を踏まえ、今後4年間（2026年度から2029年度まで）の基本的な方向性を整理するものである。

萩ジオパークでは、2018年度以降、4年ごとに計画の見直しを行いながら取組を進めてきた。本計画は、第3期（2026–2029年度）にあたる計画であり、立ち上げ段階を経て、これまでの実践の成果を踏まえ、計画をさらに発展させる更新フェーズの計画として位置づける。

本計画は、萩ジオパークにおける将来の完成像や、来訪者の行動や理解のあり方を一義的に定めるものではない。地域の地質・地形を含む自然や歴史・文化、産業に対する理解は、計画や制度によって一方的に導くものではなく、人々が実際に関わり、考え、行動する中で少しずつ育まれていくものである。本計画は、そうした理解が育まれていく前提条件を損なわないことを重視し、環境整備や事業の方向性について、必要最小限の考え方と判断の枠組みを示すものである。

(2) 計画の位置づけと構成

本計画は、萩ジオパークの取組全体に関わる上位計画として、活動の基本的な考え方や判断の基準、施策の構造を示すものである。

計画の推進にあたっては、本計画の下位計画として、施策や仕組みを具体化する「実行計画」および、年度ごとの工程を整理する「行動計画」を策定し、相互に連動させながら運用する。



(3) 計画期間

本計画の計画期間は、2026年度から2029年度までの4年間とする。

1-2 基本方針

(1) 背景：ジオパークの理念とこれまでの活動

ジオパークは、地球の歴史の生き証人である地質や地形を守りながら、そこから自然の仕組みや人々の暮らしとの関係性を学び、その成果を活用することで、持続可能な手法による社会発展に寄与することを目的とした取組である。

これまで萩ジオパークでは、講座や現地ガイド、学校教育、体験プログラム等を通じて、理念の共有と理解の促進に取り組んできた。地質や地形といった自然科学的な視点に加え、歴史、文化、産業など、人の営みと大地とのつながりを総合的に捉える

第1章 基本計画

ことで、地域の成り立ちや「らしさ」への理解を深めてきた。その中で、持続可能な発展のために「大地と人のつながり」に目を向けることの重要性についても、認知が広がりを見せている。

(2) 課題：啓発活動と産業・経済活動との乖離

一方で、理念への理解や共感が広がるほど、その理念と現実の経済活動や産業構造との間に距離が生じ、実社会での取組として定着しにくいという課題も見えてきた。

環境への配慮が「あるべき姿」として語られる一方で、実際の現場では、経済性や事業の継続性との両立が難しく、理念が行動や仕組みに十分に落とし込まれないままに終わるケースも少なくない。その結果、環境分野の取組が、理想論や啓発活動にとどまり、産業や経済とは切り離されたものとして受け止められてしまう状況が生じてきた。

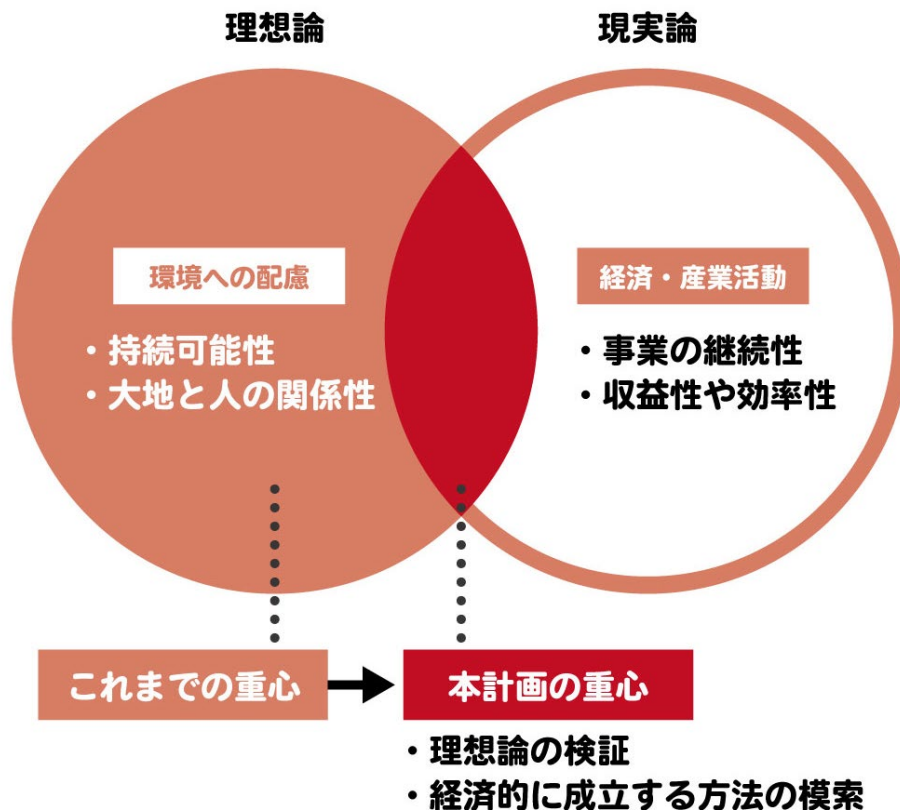
(3) 基本方針：理念の「普及」から「実装」へ

こうした課題を踏まえ、萩ジオパークの活動の第3期においては、理念の普及にとどまらず、実践を通じて社会の中で機能する形へとつなげていくことを重視する。

調査・研究や試行錯誤を通じて得られた知見を活かし、商品やサービスとして具体化された成果を、社会の中で継続的に機能させていくことで、環境への配慮と経済活動を対立させるのではなく、相互に支え合いながら持続的な価値が循環する関係を構築していく。

本計画は、萩ジオパークの理念を「理解されるもの」から「社会の中で使われ、選ばれ、機能し続けるもの」へと発展させていくための指針である。次章では、この基本方針を実現するための施策の構造を整理する。

萩ジオパークは、地球と人の持続可能な関係性の構築という理想を、今後も追い求め続ける。そのうえで本計画では、こうした理想が、経済活動としても成立し得ることを、実践を通じて示すことに挑戦する。



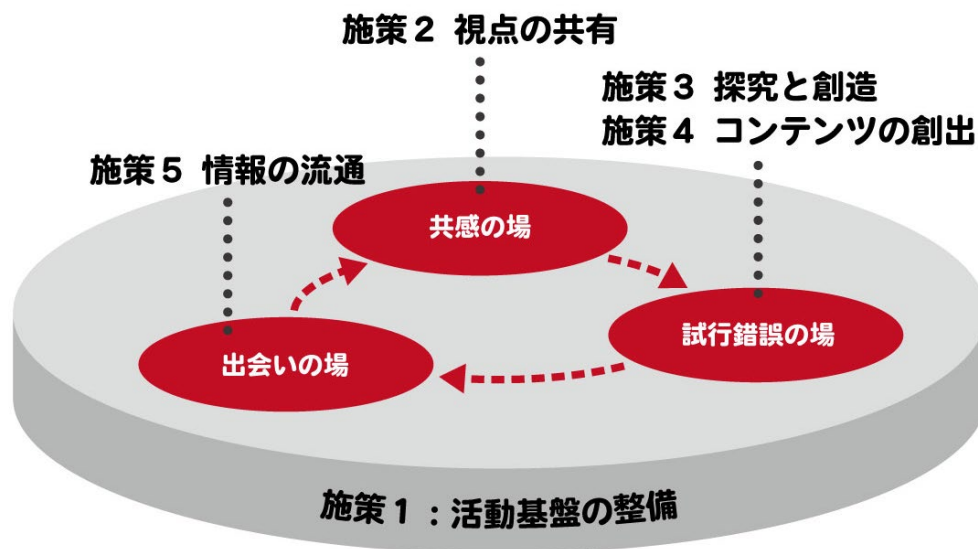
1-3 施策の基本構造

(1) 施策体系の考え方

萩ジオパークの取組は、個別の事業を並列的に進めるものではない。人や団体が段階的に参加し、関わりを深めながら続いていく構造として整理する。

本計画では、「共感の場」「試行錯誤の場」「出会いの場」という三つの場を中核に据え、理念への理解と共感を起点として、探究や創造の活動が生まれ、その成果が社会と共有されることで新たな出会いが生まれる循環を形成する。

第1章 基本計画



(2) 循環型構造としての施策配置

施策1は、すべての取組を支える基盤施策であり、施策2から施策5を成立させる前提となる。

施策2から施策5は、関心の芽生えから主体的な実践、成果の社会的定着、そして新たな関係の創出へとつながる循環を形成する施策群である。

これらの施策は直線的な工程ではなく、関わり方の変化に応じて行き来することを前提とした構造として位置づける。

(3) 各施策の基本的役割

施策1 活動基盤の整備

ジオサイトの価値を維持し、必要な情報に誰もがたどり着ける環境を整えることで、すべての施策を下支えする基盤施策である。

施策2 共感の場づくりによる【視点の共有】

萩ジオパークの考え方や視点への理解と共感を重ね、次の「試行錯誤の場」へと進む人や団体が生まれてくる起点となる施策である。

施策3 試行錯誤の場づくりによる【探究と創造】

理念に共感した人や団体が、正解のない課題に向き合いながら主体的に探究や創造に取り組む中核施策である。

施策4 試行錯誤の場からの【コンテンツの創出】

施策3を通じて生まれた成果を、商品やサービスとして社会に提示し、継続的に利用・提供される状態へとつなげるための施策である。これにより、取組を理念や啓発にとどめず、産業や経済の中で機能する形へと進めていく。

施策5 出会いの場づくりによる【情報の流通】

萩ジオパークをまだ知らない人々との接点をつくり、新たな関心を生み出す入口となる施策である。

(4) 施策間の関係性

施策2から施策5は相互に関連しながら循環し、関係者の関わり方の変化に応じて行き来することを想定する。本計画では、この循環が継続的に回り続けることを重視する。

第1章 基本計画

1-4 行動計画の考え方

本計画に基づく取組の具体的な実施内容や工程は、行動計画として整理する。

行動計画は、施策の構造を踏まえつつ、成果が社会の中で継続的に機能する状態に至るまでの過程を見据えて運用する。萩ジオパークの取組は試行錯誤を前提とするため、行動計画は固定的な工程表とせず、実践の蓄積や状況の変化に応じて見直すものとする。

本計画と行動計画は、文書としては階層化しつつ、実態としては一体的に運用する。

1-5 計画の推進と見直し

本計画は、萩ジオパーク推進協議会を中心に、関係者との連携のもとで推進する。

計画の推進にあたっては、施策の実施状況に加え、成果が社会の中で機能しているかという視点から確認を行い、必要に応じて実行計画や行動計画を見直す。本計画は、計画期間中においても固定的に運用するものではなく、実践の蓄積や社会環境の変化を踏まえながら、柔軟に更新する。

第2章 実行計画

2-1 総論

(1) 本実行計画の位置づけと構成について

萩ジオパークの取組は、地質や地形を手がかりとして、自然の営みと人の営みとの関係に目を向ける視点を共有し、それぞれの立場や関心から考えるための土台を整えていくものである。

本実行計画は、基本計画で示した考え方を踏まえ、萩ジオパークの取組が現実の中で継続的に行われていくための構造と役割分担を整理することを目的としている。

(2) 実行計画の役割

本実行計画は、個々の取組内容や実施方法を定めるものではなく、取組が行われる際の前提条件や関係性を整理するものである。

萩ジオパークに関わる取組は、協議会、行政、専門機関、地域住民など、多様な主体によって担われてきた。本実行計画では、こうした取組がそれぞれの主体性を保ちながら、相互に関係し、並存し続けるための枠組みを示している。

(3) 施策構成について

本実行計画は、次の5つの施策によって構成されている。

施策1：活動基盤の整備

第2章 実行計画

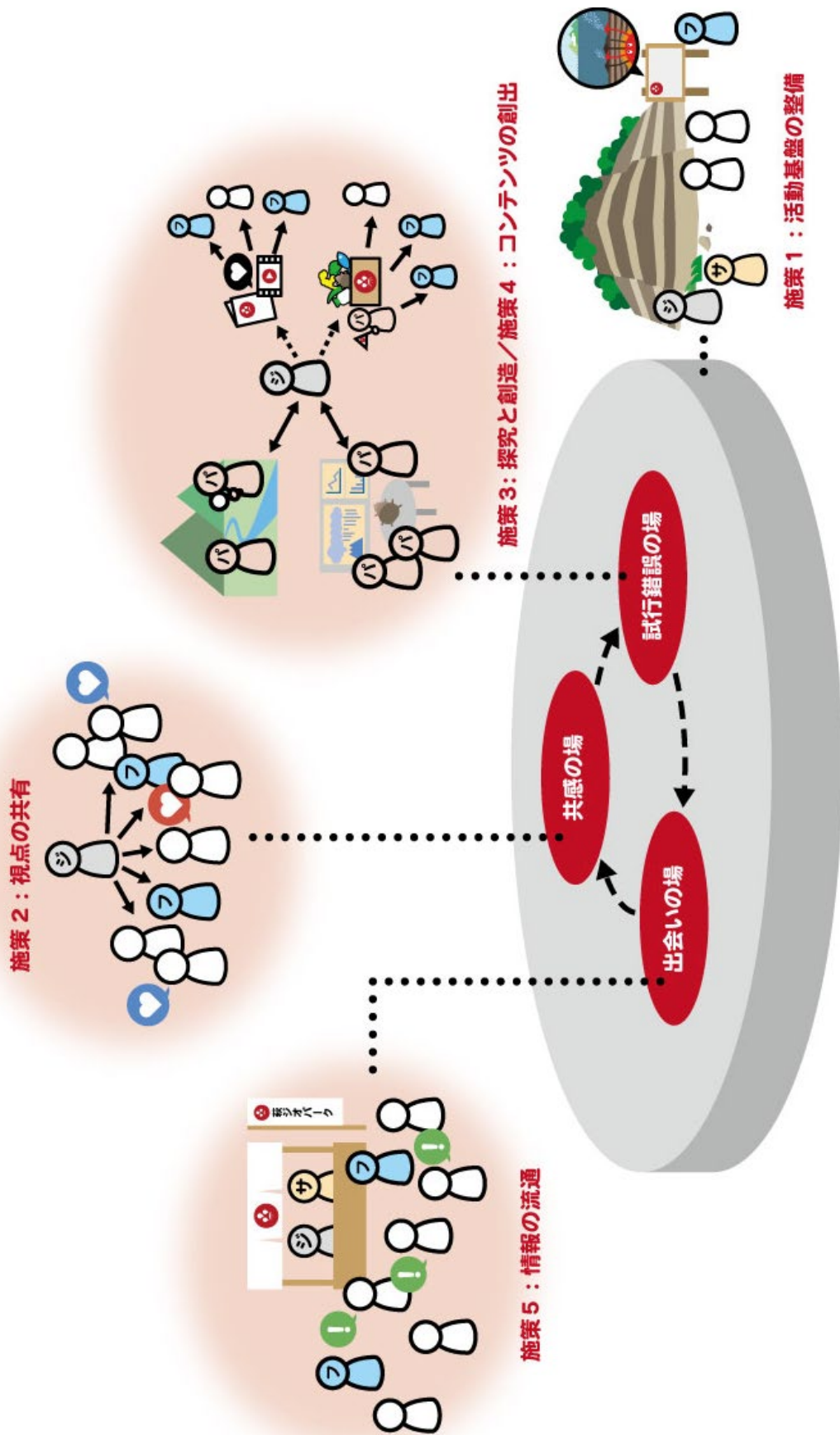
施策2：共感の場づくりによる【視点の共有】

施策3：試行錯誤の場づくりによる【探究と創造】

施策4：試行錯誤の場からの【コンテンツの創出】

施策5：出会いの場づくりによる【情報の流通】

これらの施策は、実施順序や関与の段階を示すものではなく、それぞれが相互に関係しながら存在するものとして整理している。どの施策から関わりが生じるかは、状況や主体によって異なる。



第2章 実行計画

(4) 取組と仕組み(場)の関係について

本計画の施策を構成する主な取組は、

- 地域住民や団体・企業による主体的な活動
- それらの活動が生まれ続けるための協議会の取組

の2つが重なり合うことで成立している。前者は、内容や形に正解を定めないことを前提とした活動であり、後者は、活動を支える仕組み(場)を整えるという点で、目指す状態を明確にすることができる取組である。

このため本実行計画では、地域主体の活動内容そのものを詳細に定めるのではなく、それらの活動を支え、つなぎ、広げていくために協議会が担うべき仕組み(場)のあり方を明確にすることを重視している。

(5) 新たに設ける3つの関わり方

本実行計画では、各施策の取組への関わり方として、主体的に実践を担う「パートナー」、運営を支える「サポーター」、考え方に触れ応援する「ファン」という3つの立場を想定し、それぞれが状況に応じて行き来しながら関われる構造として整理する。

パートナー

- 施策3・施策4において、主体的に試行錯誤や実践に取り組む立場
- 調査、企画、商品・プログラム開発等に関わる
- 協議会と対話しながら活動を進める

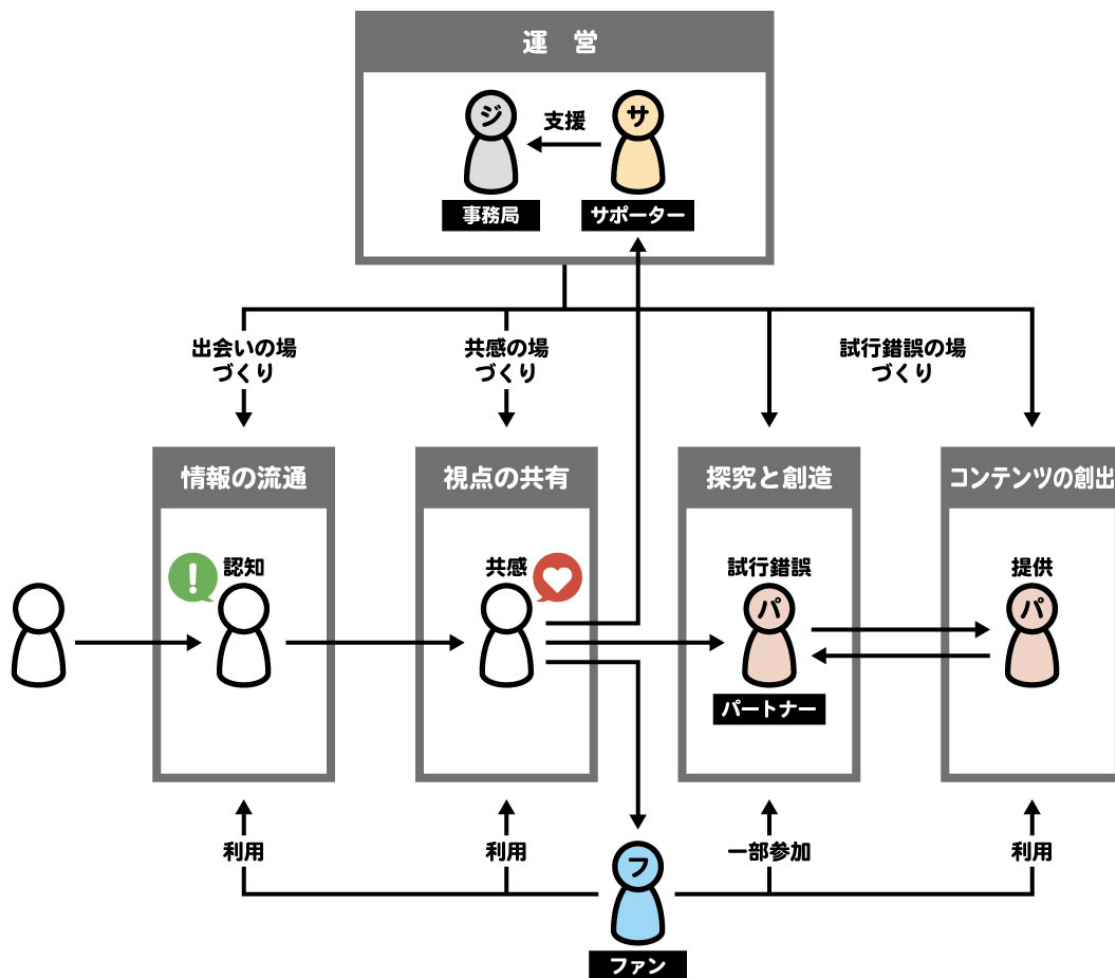
サポーター

- 活動の趣旨に共感し、可能な範囲で協力する立場
- 運営補助、現地対応、情報発信等を担う場合がある
- 関わり方や関与の度合いは固定しない

ファン

- 萩ジオパークの考え方に触れ、関心を持つ立場
- イベント参加や情報の受け取りなど、ゆるやかな関わりを想定する
- 特定の役割や責任は負わない

※これらの立場は**序列**ではなく、また**固定**されたものでもない。状況や関心の変化に応じて、行き来することを**前提**とする。



これらの関わり方が一過性のものにとどまらず、継続的に機能し、次の活動や関係性につながっていくために、協議会が仕組み（制度）として新たに整理していく。それぞれを、

- パートナー制度
- サポーター制度

第2章 実行計画

- ファン制度

とする。これら三つの制度は、以下のような考え方に基づいて構成される。

- 「どんな関わり方か」が分かること

参加する人が、自分は何を期待されているのか、どこまで関わればよいのかを、無理なく理解できること。

- 関わり方を固定しないこと

最初は見学や応援から始め、興味や状況に応じて関わり方を深めたり、逆に距離を置いたりできるなど、人の関わり方が一方向に縛られないこと。

- 判断や責任は協議会が担うこと

各制度の参加者が、判断や最終的な対応を求められることはなく、必要な判断や調整は協議会が行うこと。

- 情報や声が行き交う仕組みを持つこと

活動の状況や地域の変化が共有され、気づきや意見が協議会に届き、次の活動や改善につながっていく流れがあること。

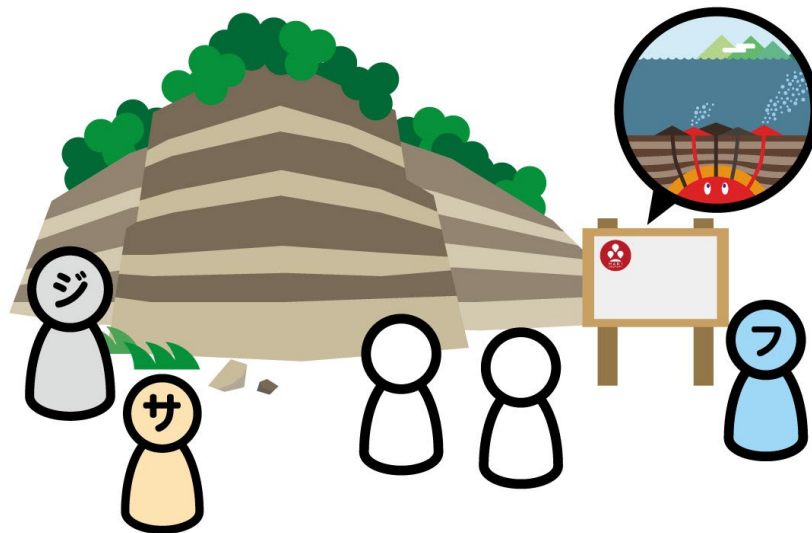
- これまでの関わりを土台にすること

新しい人間関係を一からつくるのではなく、これまでの活動の中で自然に生まれてきた関わり方を、分かりやすく整理し、続けやすくすること。

これらの制度は、地域主体の活動内容そのものを規定するものではなく、そうした活動が生まれ、広がり、継続していくための仕組みとして位置づける。

2-2 施策の内容

施策1：活動基盤の整備



(1) 施策の位置づけ

本施策は、萩ジオパークの根幹であるジオサイトを適切に保全し、解説・案内・情報の環境を整えることで、施策2～5の活動の“指針となる情報”を継続的に提供できる状態をつくる施策である。

ジオサイトは必ずしも活動の「舞台」ではなく、地域の成り立ちや自然（地球）の仕組みを読み解くための観察対象であり、地域の学び・探究・創造を方向づける基準点（情報の源）である。

この基準点が劣化したり、情報が不足したり、誤って伝わったりすると、施策2以降の活動も薄くなる。

(2) 主な取り組み

本施策では、萩ジオパーク推進協議会を中心として、次のような取り組みを行う。

第2章 実行計画

a ジオサイトの保全と状態の把握

- ジオサイトの価値を損なわないための保全
- 利用・風化・災害等による影響の把握と必要に応じた対応
- 点検・見守りなど、状態を継続的に把握する仕組み

b 現地の案内・解説環境の整備

- 案内板・解説板等の整備（新設・更新・適正配置）
- 利用者が迷わず安全に観察できる最低限の環境整備（動線・注意喚起等）
- 誤解を生まない解説（根拠と見方が伝わる表現）への改善

c ネット上の情報環境の整備

- 公式サイト等での情報の整理
- SNS等も含め、情報が行き交う場で参照できる基準情報の提示
- 情報の更新・改訂

d 情報の蓄積と共有の仕組み

- ジオサイトに関する基礎情報（位置・特徴・観察ポイント等）の整理
- 活用の中で得られた知見（問い・気づき・注意点等）の蓄積
- パートナーや関係者が参照できる形での共有

※具体的な整備箇所、更新時期、実施順序は行動計画で整理する。

（3）この施策で大切に考える考え方（判断の基準）

-
- 保全と利用は対立するものではなく、両立を目指す
 - すべてのジオサイトを同じ水準で整備する必要はない
 - 地域の関わりや利用のされ方に応じた管理を行う
 - 情報は一度作って終わりではなく、運用の中で更新されるものである

そのため、本施策では、

- 過度な施設化・演出に依存しない

- 根拠の薄い言い切りや誇張を避ける
- 利用者の安全と、観察の質の両方を意識する

(4) 関わり方の構造（協議会と関係者の役割）

a 萩ジオパーク推進協議会

- ジオサイトの価値と「見方（読み解きの視点）」の整理
- 案内板・解説板・Web等の情報整備の方針づくりと更新
- 点検・見守り・改善の仕組みの調整
- 関係者からの情報（異変・改善提案等）を受け止め、反映する

b 地域住民・関係団体・行政

- 日常の見守り、異変の共有
- 維持管理・整備への協力（可能な範囲で）
- 利用実態や課題の共有

(5) この施策で行わないこと

本施策では、以下のことを行わない。

- 過度な施設整備や演出を目的化すること
- 情報を一元管理し、現場の声や更新を止めること
- 利用促進のみを優先し、保全や安全を後回しにすること
- 断片的な発信で誤解を広げること

(6) 施策全体との関係

- 施策1は、施策2～5の前提として、活動の指針となる情報（基準点）を提供する
- 施策2（共感）では、ジオサイトの「見方」が理解の入口になる
- 施策3（探究）では、観察対象として問いを生み、調査の根拠になる

第2章 実行計画

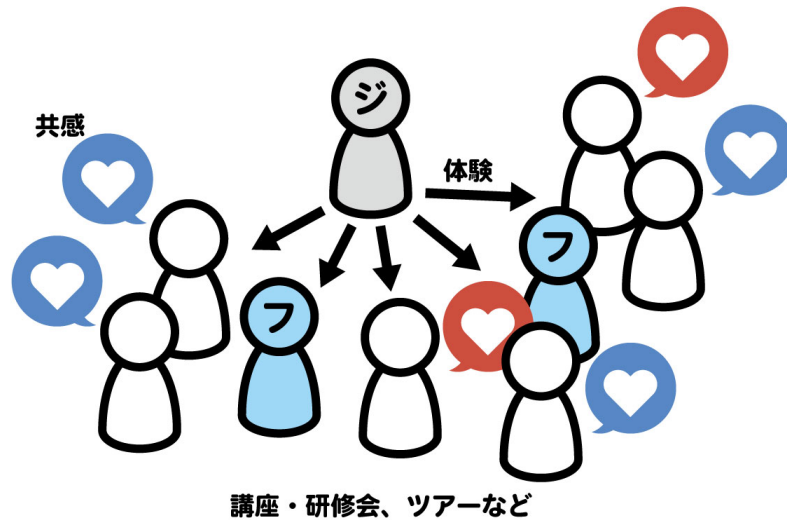
- 施策4（創出）では、解説や表現の根拠・素材になる
- 施策5（情報の流通）では、流通する情報の参照点（基準情報）になる

（7）行動計画との関係

本施策に基づく具体的な整備内容（案内板・解説板の更新、Web整備、点検頻度等）は、行動計画において年度ごとに整理する。

行動計画では、整備の量ではなく、必要な情報が参照でき、更新され、状態が維持されているかを重視する。

施策2：共感の場づくりによる【視点の共有】



(1) 施策の位置づけ

本施策は、萩ジオパークの考え方や視点に人々が触れ、それぞれの立場で受け止め、次の関わり方を自ら選択するための入口をつくる施策である。

知識や価値観を一方向に伝えることを目的とするものではなく、自然の営みと人の営みとの関係に目を向ける体験や対話を通じて、参加者一人ひとりの中に気づきや問いが生まれる状態を重視する。

(2) 主な取り組み

本施策では、次のような取り組みを行う。

a 学び・体験の場の提供

- 講座、研修、現地見学、フィールドワーク、ジオツアー等の実施
- 学校や教育機関と連携した出前授業や野外学習
- 一般向け、関係者向けなど、対象に応じた学習機会の設定

第2章 実行計画

b 対話を重視した場の設計

- 一方的な説明で終わらない構成
- 参加者同士、あるいは専門家・地域の人との意見交換や対話の機会
- 感想や疑問を共有できる余白の確保

c 次の関わり方につながる入口づくり

- 参加して終わりにならない導線の設計
- 施策3以降につながる関わり方が見える状態をつくる

※具体的な実施内容、回数、時期等は行動計画において整理する。

(3) この施策で大切に考える考え方(判断の基準)

- 参加の動機や関心の深さは人によって異なる
- 一度の参加で理解や共感に至る必要はない
- 同じ体験でも、受け止め方は多様であってよい

そのため、本施策では、

- 用意されたストーリーや結論を押し付けない
- 正解や望ましい行動を示すことを目的としない
- 参加者が「考える材料」を持ち帰れることを重視する

(4) 関わり方の出口としての3つの立場

本施策では、参加者が関心や状況に応じて次の関わり方を選べるよう、

- パートナー
- サポーター
- ファン

の3つの立場を出口として位置づける。

それぞれの関わり方は固定せず、関心や状況に応じて行き来できるものとする。

(5) 関係者の役割

a 萩ジオパーク推進協議会

- 場の趣旨や全体構成の整理
- 関係者間の調整と橋渡し
- 三つの立場への入口と、次の施策への接続の整理

b 専門家・地域住民・学校・関係団体

- 知見や経験の提供
- 現地対応や運営への協力

c 参加者

- 聞くだけでなく、感じ、考える
- 次の関わり方を自ら選択する

(6) この施策で行わないこと

本施策では、以下のことを行わない。

- 特定の行動や立場への誘導
- 参加者の理解度や成果の評価
- 参加者の序列化や役割の固定

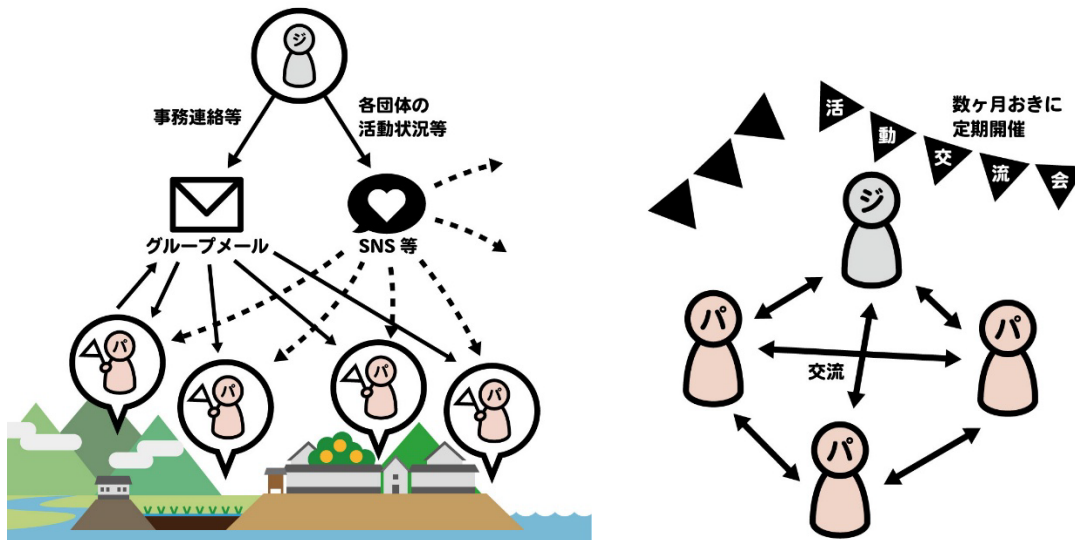
(7) 行動計画との関係

本施策に基づく具体的な実施時期、回数、対象等は、行動計画において年度ごとに整理する。

行動計画は固定的な工程表とせず、参加者の反応や社会状況の変化を踏まえて柔軟に見直す。

第2章 実行計画

施策3：試行錯誤の場づくりによる【探究と創造】



(1) 施策の位置づけ

本施策は、施策2を通じて萩ジオパークの考え方に触れ、より深く関わりたいと考えた人や団体（パートナー）が、主体的に試行錯誤や探究に取り組むための中核施策であり、試行錯誤を次の段階（体験化・商品化等）につなげる準備段階と位置づける。あらかじめ定められた正解や完成像に向かうのではなく、問いを立て、試し、考え、修正しながら進む過程そのものを重視する。

(2) 主な取り組み

本施策では、パートナーを主体として、次のような取り組みが行われるように協議会が場を整える。

a 探究・調査・試行的な実践

- 地域の自然・歴史・文化・産業等を題材とした調査や研究
- 課題や関心に基づく試作・実験・小規模な実践
- 正解の定まらないテーマへの継続的な取り組み

b アイデア・企画の試行

- 商品、プログラム、仕組み等の企画検討
- 途中段階での立ち止まりや方向転換を含む試行錯誤

c 関係者同士の情報共有と対話

- 取り組みの過程や悩みを共有する対話の場
- 他のパートナーとの意見交換や学び合い

※具体的なテーマや実施内容は、パートナーごとに異なる。

(3) この施策で大切に考える考え方(判断の基準)

- 探究の内容や進捗、成果は主体ごとに異なる
- すべての取り組みが成果物や事業化に至る必要はない
- 試行錯誤の過程そのものに価値がある

そのため、本施策では、

- 成果や完成度を基準とした評価を行わない
- 短期間での結論や結果を求めない
- 途中で立ち止まる、変える、中断することを否定しない

(4) 関わり方の構造(パートナーと協議会の役割)

a パートナー(活動主体)

- 自らの関心や課題意識に基づき、探究や実践を行う
- テーマ設定、方法、進め方を主体的に判断する
- 必要に応じて、他のパートナーや協議会と対話を行う

b 萩ジオパーク推進協議会(共同研究者・共同開発者)

- パートナーと同じ立場で問いを共有し、考える
- 視点や知見を持ち寄り、探究が深まる余地を広げる

第2章 実行計画

- 取り組み同士が孤立しないよう、対話や情報共有の場を整える
- 施策4への展開可能性が生まれた場合、その橋渡しを行う

c サポーター（運営支援・補助）

- 調査や実践の場で補助的に関与する
- 企画・実施時に運営を支援する

d ファン（試行錯誤への一部関与）

- 公開された試行や発表に触れる
- 感想や反応を通じて活動を支える

（5）この施策で行わないこと

本施策では、以下のことを行わない。

- 取り組み内容や方法の指示・統制
- 成果の有無による評価や選別
- 特定の事業化・商品化を正解として設定し、そこへ誘導すること

（6）施策2・施策4との関係

- 施策2で生まれた関心や問いが、施策3で具体的な探究につながる
- 施策3で蓄積された試行錯誤の一部は、施策4において社会と共有される可能性を持つ

ただし、すべての取り組みが次の施策に進む必要はない。

（7）行動計画との関係

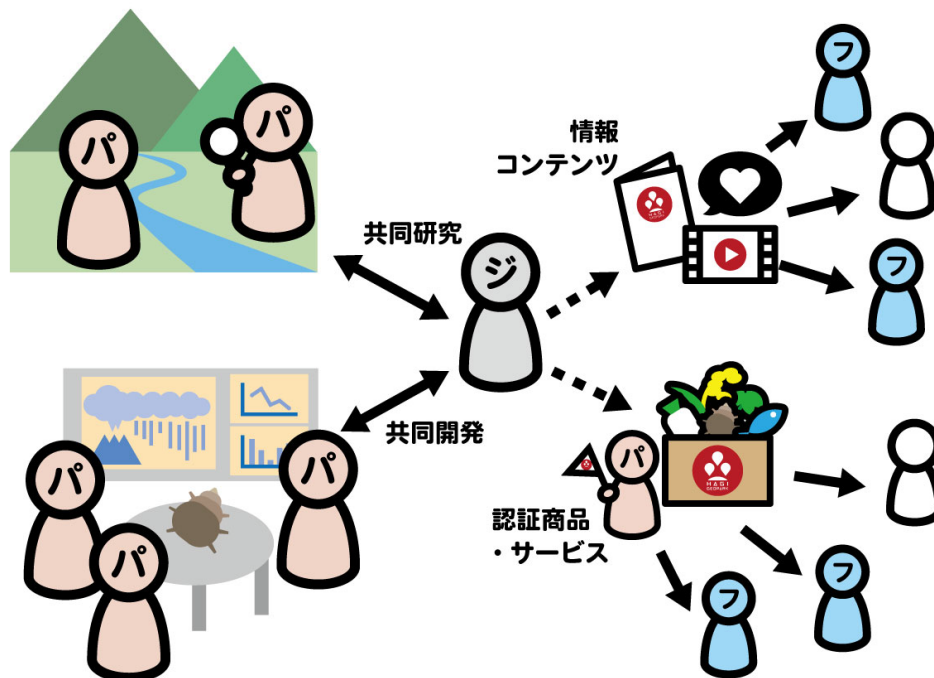
本施策に基づく具体的な支援の方法や対話の頻度等は、行動計画において年度ごとに整理する。

第2章 実行計画

行動計画では、個別の実践内容を管理するのではなく、**試行錯誤が継続できる状態を保つための対応**を位置づける。

第2章 実行計画

施策4：試行錯誤の場からの【コンテンツの創出】



(1) 施策の位置づけ

本施策は、施策3における探究や試行錯誤の成果を体験・商品・サービスとして市場に出し、経済活動としても成立するかどうかを実際に問う段階を担う施策である。

ここで扱う「コンテンツ」とは、商品・サービスや体験プログラムだけでなく、文章や動画などの情報発信を含む、他者が触れ、関わることのできる形を指す。

(2) 主な取り組み

本施策では、パートナーを主体として、次のような取り組みが行われるように協議会が場を整える。

a 試行錯誤の整理と可視化

- 探究や実践の過程で得られた知見や経験の整理

- 成果だけでなく、背景や考え方を含めた記録
- 他者に伝えることを意識した形への編集

b コンテンツとしての具体化

- 体験プログラム、商品、教材、展示、発信物等への展開
- 規模や完成度を問わない、小さな形での試作
- 社会に出すことを前提とした表現の工夫

c 共有・発信の機会づくり

- イベント、公開の場、情報発信を通じた共有
- 地域内外の人が触れられる機会の創出

※どの取り組みを行うかは、パートナーごとに異なる。

(3) この施策で大切に考える考え方(判断の基準)

- すべての試行錯誤がコンテンツ化される必要はない
- 完成度や完成形を最初から求めない
- コンテンツは「完成」ではなく「仮の形」として扱う

そのため、本施策では、

- 成果のみを切り取って扱わない
- 分かりやすさのために、背景や文脈を削りすぎない
- 社会に出した後も、修正や更新があり得る前提とする

(4) 関わり方の構造(パートナーと協議会の役割)

a パートナー(活動主体)

- 探究や実践をもとに、コンテンツの形を考える
- 内容や表現方法について主体的に判断する

第2章 実行計画

- 社会との接点を意識しながら試作・発信を行う

b 萩ジオパーク推進協議会（共同研究者・共同開発者）

- パートナーとともに、伝え方や位置づけを考える
- 誤解や過度な単純化を避けるための視点を提供する
- 複数の取り組みをつなぎ、全体の文脈を整える
- 体験・商品・サービスを実際に提供・販売する場（売り場・機会）を整える
- 施策5（社会への還元・評価）への接続を意識した調整を行う

c サポーター（運営支援・補助）

- 提供・発表の場づくりで運営を補助する

d ファン（利用者・理解者）

- コンテンツを利用したり、購入したりする
- 感想や反応を通じて活動を支える

（5）この施策で行わないこと

本施策では、以下のことを行わない。

- 成果物の完成度による評価や選別
- 協議会主導による一律のコンテンツ化
- 短期的な成果や話題性のみを重視した発信
- 一度形にしたものを固定化すること

（6）施策3・施策5との関係

- 施策3で蓄積された試行錯誤の一部が、施策4で形を持つ
- 施策4で生まれたコンテンツは、施策5において社会との関係性の中で活用・評価される

※ただし、施策3 → 施策4 → 施策5という一方向の流れに限定するものではない。

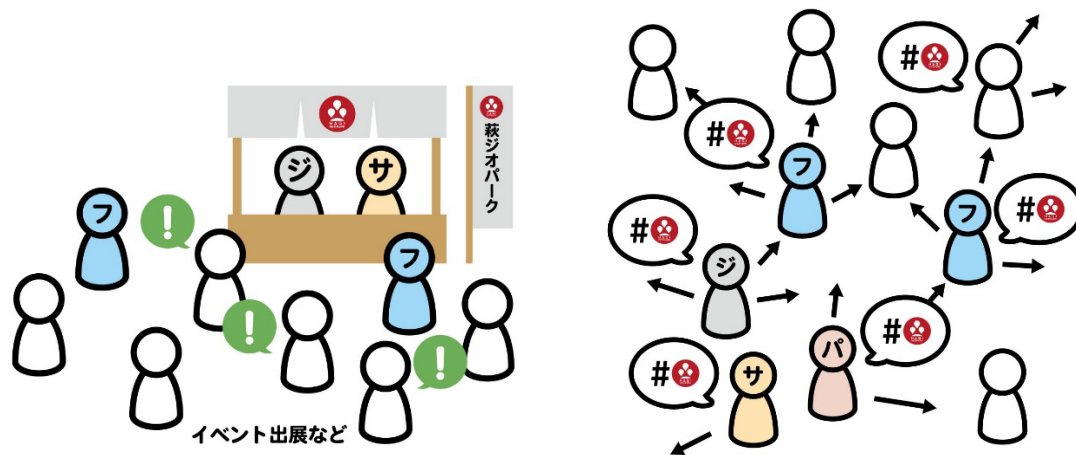
(7) 行動計画との関係

本施策に基づく具体的な支援内容、発信の機会、連携先等は、行動計画において年度ごとに整理する。

行動計画では、コンテンツ化の数や成果を管理するのではなく、試作と共有が継続できる状態を保つための対応を位置づける。

第2章 実行計画

施策5：出会いの場づくりによる【情報の流通】



(1) 施策の位置づけ

本施策は、施策2～4を通じて生まれた活動やコンテンツ、人の動きを、リアルな場およびネット上の場を通じて循環させる施策である。

ここで重視するのは、情報を一方向に「発信」することではなく、出会いをきっかけとして情報が行き交い、再解釈され、次の関係が生まれる状態である。

(2) この施策を運用するうえでの前提

本施策では、リアルな場とネット上の場を組み合わせ、次のような取り組みを行う。

a リアルな出会いの場の設計

- イベント、交流会、公開の場等の開催
- 立場や関心の異なる人が交わる機会の創出
- 偶然の出会いや立ち話が生まれる余白のある場づくり

b ネット上の出会いの場の活用

- SNS やウェブ等を通じた情報共有・発信
- 活動やコンテンツに触れる入口の整備
- コメントや反応を通じた緩やかな対話の促進

c 情報が流れ続ける仕組みづくり

- リアルとオンラインを行き来する導線の設計
- 一度きりで終わらない情報の受け渡し
- 人づて・共有を通じて広がる情報の流れを意識した工夫

(3) この施策で大切に考える考え方(判断の基準)

- 情報の受け止め方は人によって異なる
- 同じ情報でも、文脈や接点によって意味が変わる
- リアルとオンラインは対立するものではなく、補完関係にある

そのため、本施策では、

- 一方的な発信や拡散のみを目的としない
- 正解となる解釈や反応を求めない
- 注目度や反応数だけで価値を判断しない

(4) 実施主体と役割分担

a パートナー

- 自らの活動やコンテンツを、リアル・オンライン双方の場に持ち出す
- 出合いや反応を受け取り、次の取り組みにつなげる
- ネット上のやり取りを、探究や実践に活かす

b 萩ジオパーク推進協議会

- リアルとオンラインをつなぐ場や導線を設計・調整する
- 異なる活動や人同士が出会う機会を整える
- 情報が特定の場に滞らず、行き交う状態を保つ

第2章 実行計画

- 施策2・3へのフィードバックを意識した整理を行う

※協議会は、情報を管理・統制する立場ではなく、**情報が流通し続ける環境を整える役割**を担う。

c サポーター（運営支援・補助）

- リアル・オンライン双方の場において運営を支える

d ファン（利用者・理解者）

- 活動やコンテンツを利用し、楽しみ、共有する
- 情報や価値が社会に広がる循環を担う

（5）この施策で行わないこと

本施策では、以下のことを行わない。

- 情報の一元管理や統制
- フォロワー数や反応数のみを目的とした運用
- 正解となる受け止め方の提示
- 形式的な交流や発信の継続

（6）施策全体との関係

- 施策5は、施策2～4で生まれた人・活動・コンテンツがリアル・オンライン双方の場で出会い、流通するための施策である
- そこで生まれた関心や問いは、再び施策2（共感の場）や施策3（探究）へと循環する

（7）行動計画との関係

第2章 実行計画

本施策に基づく場の設定や発信の方法は、行動計画において年度ごとに整理する。

行動計画では、イベント回数や投稿数ではなく、情報が対象者の次の行動をどれだけ生み出しているかを重視する。

第3章 行動計画

3-1 行動計画の位置づけ

本計画において示す各施策内の「主な取組」は、

- 地域住民やパートナーによる主体的な活動
- それらの活動が生まれ続けるための協議会の取組

の2つが重なり合って成立している。

前者は、内容や形に正解を定めないことを前提とした活動であり、後者は、活動を支える仕組み（場）を整えるという点で、目指す状態を明確にすることができる取組である。

このため行動計画では、取組全体を工程表として示すのではなく、正解を1つに定めることができる協議会による仕組み（場）づくりに着目し、その完成に向けた段階的な工程を示している。

また、これらの仕組みは特定の施策に属するものではなく、複数の施策を横断して機能することから、行動計画では施策横断的に整理している。

3-2 行動計画の構成

行動計画は、次の2つの表によって構成する。

（1）表 A：主な取組一覧と行動計画上の扱い

表 A では、実行計画に記載された各施策中の主な取組について、行動計画上の扱いを整理している。具体的には、

- 継続して実施する既存の取組

- **新しい仕組み（場）を導入して実行する取組**

を区別し、後者については、どの仕組みを前提として実行するのかを明示している。

（2）表 B：新しい仕組みの組み上げ

表 B では、表 A において「新しい仕組みの導入」または「一部に新しい仕組みを導入」と整理した取組について、協議会が担う仕組み（場）づくりを対象に、その構築過程を年度ごとに整理している。

ここで示す工程は、事業の実施回数や成果物の量を示すものではなく、各仕組みがどのような状態に至っているかを示すものである。

各年度は、次の考え方に基づいて整理している。

- **1年目：整理・位置づけ**
- **2年目：運用・並行整理**
- **3年目：安定・循環確認**
- **4年目：整理・引継ぎ**

これにより、仕組みが試行錯誤の段階から、安定的に機能し、次期計画へ引き継げる状態に至るまでの流れを示している。

3-3 行動計画の運用について

本行動計画は、4年間を通じた大まかな方向性と段階を示すものであり、各年度の具体的な取組内容や進め方については、その時々状況や関係者の動きに応じて柔軟に見直すものとする。

また、行動計画の進捗確認にあたっては、事業が計画どおり実施されたかどうかではなく、仕組みや関係性が意図した状態に近づいているかという視点を重視する。

こうした考え方のもと、行動計画は実行計画の補完として機能し、萩ジオパークの活動が持続的に展開されていくための共通の指針として活用する。

表A：継続事業一覧

施策	主な取り組み	行動計画上の扱い	場づくりのための新しい仕組み
施策1 活動基盤の整備	(1) ジオサイトの保全と状態の把握 (2) 現地の案内・解説環境の整備 (3) ネット上の情報環境の整備 (4) 情報の蓄積と共有の仕組み	継続実施（一部に新しい仕組み導入） 継続実施（必要に応じて整備・更新） 継続実施（必要に応じて整理・更新） 継続実施（必要に応じて運用改善）	サポーター制度
施策2 視点の共有	(1) 学び・体験の場の提供 (2) 対話を重視した場の設計 (3) 次の関わり方につながる入ロづくり	継続実施（一部に新しい仕組み導入） 継続実施（設計・運用は随時見直し） 新しい仕組みの導入	サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度
施策3 探究と創造	(1) 探究・調査・試行的な実践 (2) アイデア・企画の試行 (3) 関係者同士の情報共有と対話	新しい仕組みの導入 新しい仕組みの導入 新しい仕組みの導入	パートナー制度／サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度
施策4 コンテンツの創出	(1) 試行錯誤の整理と可視化 (2) コンテンツとしての具体化 (3) 共有・発信の機会づくり	新しい仕組みの導入 新しい仕組みの導入 新しい仕組みの導入	パートナー制度／サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度
施策5 情報の流通	(1) リリアルな出会いの場の設計 (2) ネット上の出会いの場の活用 (3) 情報が流れ続ける仕組みづくり	継続実施（必要に応じて運用改善） 継続実施（必要に応じて運用改善） 新しい仕組みの導入	パートナー制度／サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度 パートナー制度／サポーター制度／ファン制度

表B：新しい仕組みの組み上げ

	1年目（2026年度）	2年目（2027年度）	3年目（2028年度）	4年目（2029年度）
	整理・位置づけ	運用・並行整理	安定・循環確認	整理・引継ぎ
サポーター制度	既存の活動者を整理し、役割と位置づけを明確化	制度としての運用方法を整理	支援・見守りの型が安定して機能	制度の見直しと整理
パートナー制度	既存事例の整理と制度の位置づけ	複数事例の並行整理	再現可能な関わり方として整理	制度の考え方を整理し、次期計画へ引き継ぎ
ファン制度	潜在的な関心層との関係性を整理	登録・還元の仕組みを整理	情報・関係性の循環を確認	制度としての整理・改善点の明確化
施策横断の循環構造	既存の施策間の行き来を可視化	接続の仕組みを整理	循環が自然に生まれる状態を確認	全体構造を整理し、次期計画へ引き継ぎ